

ドイツ環境会計の周辺

柳 田 仁

目 次

はじめに

I 児童の環境教育

II 学生および市民のための環境教育

III ハノーファー万博におけるテーマとしての環境保全

IV ドイツにおける環境ビジネス

おわりに

は じ め に

前回の留学以来5年ぶりのドイツ訪問で、主にデュッセルドルフ、ハノーファー、ベルリン等を中心に回った。この訪問では、ドイツ企業の経営会計の現状を認識すると共に、ドイツという国が、環境問題にどのように対処しているかを探ってみた。本稿では後者に、特に焦点を当てて論を進めたい。

「ドイツ環境会計の周辺」というテーマのもとに、児童、学生、市民の環境教育の問題、ハノーファー万博におけるテーマとしての環境保全および環境ビジネスに関して論述した。

I 児童の環境教育

1-1 ある児童向け本より

宿泊しているホテルのあるベルリン＝スパンダウ駅キオスクで、児童向け環境啓発絵本を見つけた。書名は「僕には清掃人のお友達¹⁾がいる」という本である。この本は、児童・幼児はもちろん我々にもドイツのゴミ清掃人の仕事が詳細に理解できるので、以下にその概略を紹介しよう。

僕には Klaus という名のゴミ回収・運搬の仕事をするお友達がいる。僕らの町ではたくさんのゴミが出るので、Klaus は何時も忙しい。ママは、彼が大切な仕事をしているんだと言っている。それで、僕等は、ゴミをビン、古紙、土にかえるゴミ等というように分別するお手伝いをしている。

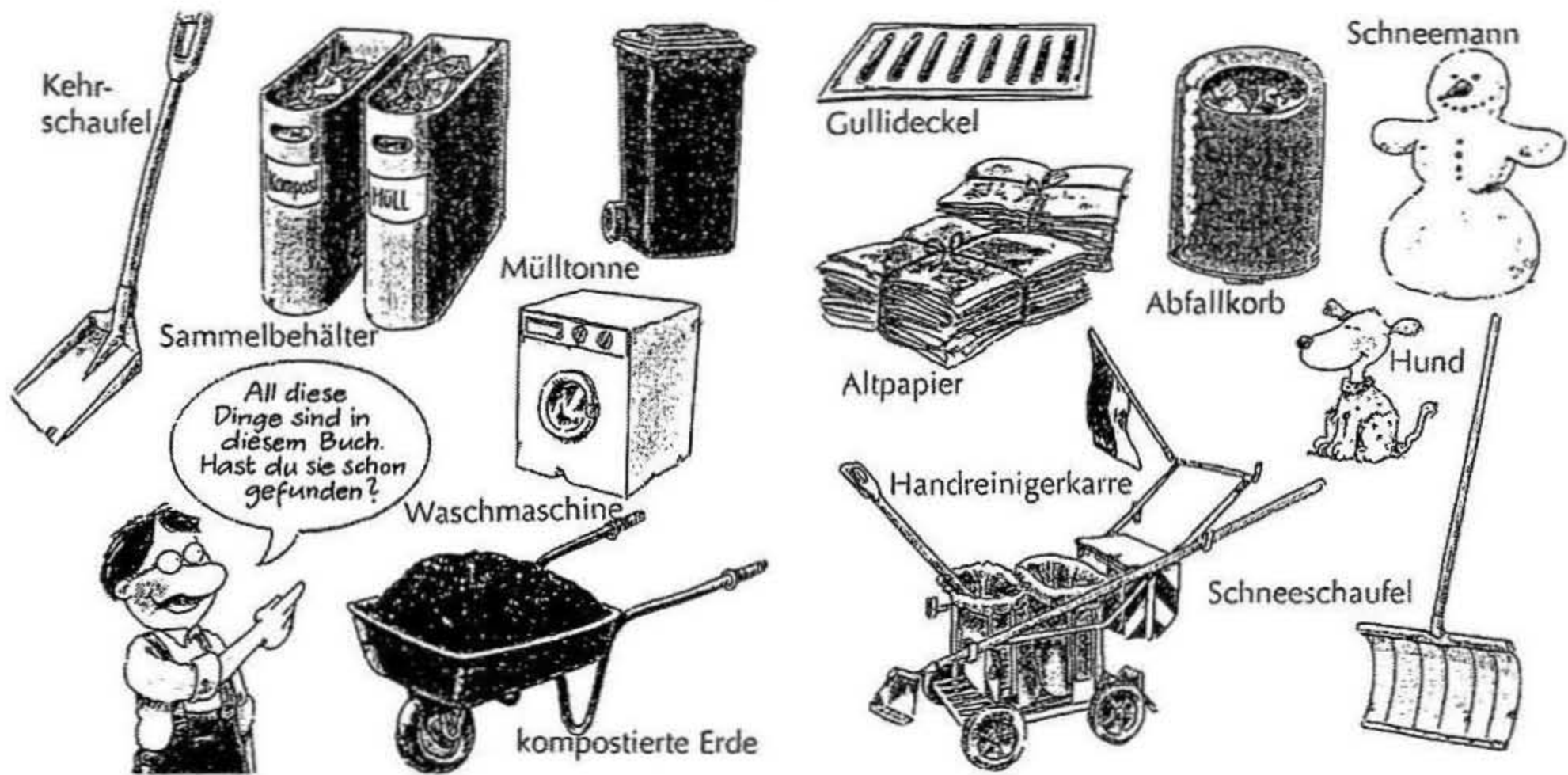
Klaus の奥さんの Eva は、ガーデニングが好きだ。それで、僕はサラダ菜クズ、コーヒーかす、果実の皮、卵殻のような台所から出る生ゴミを彼女のところに持っていく。Eva は、これらの生ゴミと落葉や草とを混ぜて堆肥を作っている。「彼女の小さな土壌工場の作業員にはミミズさんがいるのです。」

Klaus 等清掃人は、ゴミ回収車で町中を回り、バケツやコンテナに詰まっているゴミを回収する。これらのゴミは、郊外のデポニーに運ばれ、ここで埋められるが、恐ろしく臭い場所である。これらのゴミが、あまり場所を取らないように圧縮車と呼ばれる専用トラクターで押し固められる。デポニーが満杯になると埋められるが、そこからはガスが発生する。そのようなガスは、ゴミを燃やす焼却場からも発生する。

分別され再利用可能なゴミはリサイクル場へ運ばれる。そこには古紙、プラスチック、ガラス等に分別して食べる「ぶちの牛」がいる。それは「多種の原材料収集箱である」と Klaus はユーモアをまじえて話してくれた。

週末に市場が開かれるときは、町の清掃局の人はたいへん忙しい。幸いに

図表1：清掃関連用具



も多くの人々は、買い物の際、ゴミを出さないように注意して商品を購入している。彼等は自分で袋を持ってくるので、ビニール袋を店に要求しない。また彼等は野菜をバラで購入し、過剰包装品は購入しないように心がけている。

清掃人は、定期的に町の中や通りを清潔に保っている。通りに落ちているゴミは掃き集められ、袋詰めされて清掃車に積まれる。別の清掃車はその回転刷毛で下水道をゴシゴシと擦る。それで下水道はつまらなくなり、更に浚渫車によって汚水の流れがよくなる。汚物がバキューム車で、簡単に車のタンクに吸いこまれる。

秋には落葉が散り、車道や歩道が滑りやすく危険になるので、通りの落葉は町の清掃で除去される。枯葉は、ふいごによってコンテナーに集められ、コンポスト装置に運ばれ、そこで再び土にかえる。冬には町の清掃で雪や氷を雪掻車を使って取り除く。しかし、バス停や歩道は雪掻シャベルや箒を使って除去作業をしなければならない。また、塩を使うと樹木に悪いので、たいてい砂や灰を撒く。

ところで、Klaus はよいアイデアを持っている。コンポストを持たないで、

有機ゴミをトンネ（バケツ）に投げ入れることの出来ない人用に、ゴミ収集箱の隣に「生ゴミ利用場所」を設置することを彼は提唱する。そうすれば生ゴミは豚のよい餌になり、収集ゴミも少なくなるというのである。

1-2 その他の身近な環境教育

以上、児童向け絵本を紹介したが、この本の中で幼児に清掃の仕事の内容や大切さ、分別、ゴミを出さない工夫、リサイクル等に関して教えている。

その他、市電停車場近くの幼児向人形劇場があったりして、芝居やゲームで環境教育に一役買っている。また、幼稚園では、給食の後、皆で後片付けをし、残りカス、紙、容器等を分別して各児童が役割分担してゴミ箱のあるところまで捨てに行くというような「実習授業」もしている。

このようにドイツでは幼少の頃より、環境教育をして可能な限り環境を配慮する精神を養っている。

Ⅱ 市民および学生のための環境教育

2-1 市民のための環境教育

州・市の環境省・局は町の身近な場所にある。そこを訪問してみて驚くことであるが、多くのパンフレットがドイツらしくよく整理され、整然と並べられていることである。それらのパンフは、そのほとんどが無料であるが中には有料で、見本を見て書店に注文しなければ手に入らないものもある。

ドイツは周知のように、連邦制であるので、地方の力が強いので地方独自の環境政策を行うところも多い。町の祭りには環境局が出張してパンフを配布して、環境に対する配慮を呼びかけている。

ある小さな町の収穫祭にて：

通りすがりの旅人も気軽に参加でき、町民と一緒に楽しむことができる町の収穫祭に遭遇した。祭りの屋台では、ソーセイジ、肉・ジャガイモ料理等

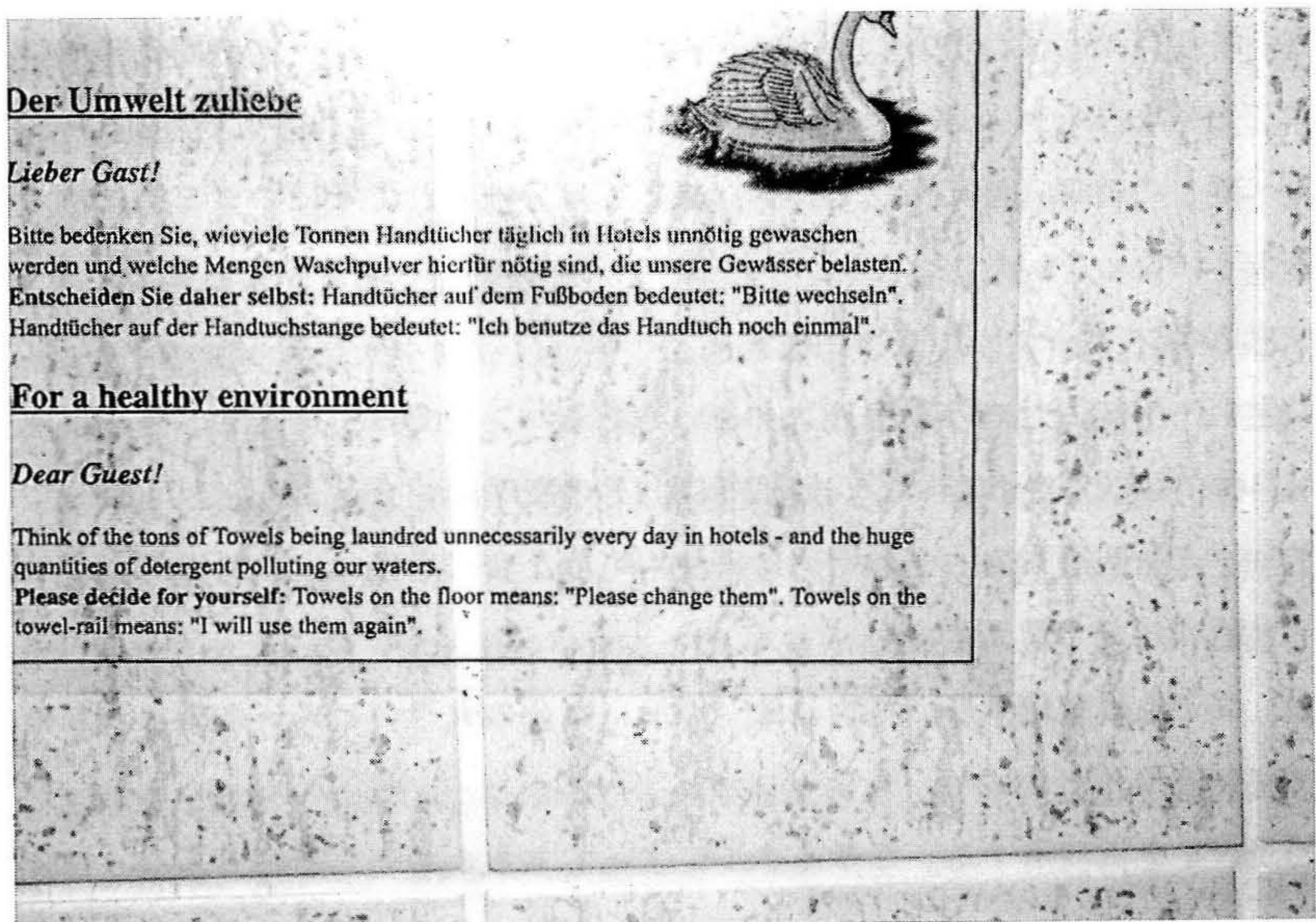
およびワイン，ビール，ノンアルコール飲料が売られていた。注文したジャガイモ料理の皿にはデポジット制が採用されており，フォークは間伐材で製作した粗末な木製のものであった。皿は返還されると，洗浄され再使用され，食べ残しの料理，使用済フォーク，紙類等は分別されてそばのゴミ箱に捨てるようになっていた。

あるパンフレットより：

学生・生徒のための環境ヒントというあるパンフでは，遵守すべき10事項が具体的に記載されている。以下では，その概略を紹介しよう。

- (1) ゴミを回避する。そのために再使用可能な食器を使い，飲料はデポジット制のビンで購入する。
- (2) ゴミを減量化する。買物には，環境に負荷の大きいビニール袋よりも布袋を使う。
- (3) ゴミを再利用する。リサイクルによってエネルギーも節約できる。包装容器は，デュアル・システムの回収コンテナーを通じて処理する。
- (4) 衣服・カーテンは可能な限りクリーニングに出す回数を減らす。また購入時には，家庭で洗濯可能な素材か否かに注意する。
- (5) 魅力的な筆記用具の背後には，環境問題が潜んでいる。その有毒性と短命性である。それゆえ，筆記用具としては昔から使われている鉛筆を使う。
- (6) 残った薬品類は，みだりにゴミ箱に捨てないで，薬局に引き取ってもらう。
- (7) 河川・海洋に環境負荷の大きい着色・漂白紙は，使用しない。
- (8) 自動車の利用は，できるだけ避け，乗車するときでもアイドリングは絶対に避ける。
- (9) 部屋の模様替えの時は，古い家具等は伝言板で再利用を呼びかける。
- (10) 友人や一般市民との話の中で，環境問題への喚起をし，政治家には更に環境保全のために努力するよう要求する。²⁾

図表2：Düsseldorf市のホテル洗面所に貼りつけてあったステッカー



更に、市の運営するフォルクスシューレ (Volksschule) では、外国人のためのドイツ語コースの他に自然教室等も開いており、自然保護、環境の大切さも教えている。そのツアーで町の中を巡回したり、大学付属植物園・庭園等を訪問したりする。

2-2 大学での環境経営教育

ドイツでは、「日本人の電気好き」は有名らしい。コピー室を兼ねた研究室でコピーを取るのに少し薄暗いので電気をつけたら露骨にいやな顔をされた。エネルギーの浪費による環境負荷を考えてのことである。また昼食でメンザへ行っても食べ残し、紙、その他のものとの分別はなかなか厳しい。

大学教育においても、既に6年前に環境報告書をゼミ発表の教材に学生が使い報告していたのを憶えている。

以下本章では、ドイツで最初に環境関連講座を体系的に設置したミュンスター大学、有力教授のもとに環境関連講座の充実しているデュッセルドルフ大学およびアーヘン工科大学の環境経営会計関連のカリキュラムを紹介しよう。

このカリキュラム表で理解できることは、経営経済環境関連の科目担当者の問題である。担当可能な教員のもとに助手講師も集まり、講座も充実していることである。ただ、この数年のカリキュラム表を見て、講義科目が固定化し以前のような弾力性がないことも感じる。

図表 3：M 大学、D 大学およびA 工科大学における環境関連講座³⁾

	ミュンスター大学	デュッセルドルフ大学	アーヘン工科大学
1994年夏学期以前	<p>前ドイツ経営経済学会理事長 Heribert Meffert 教授をはじめとした有力教授によって90/91年冬学期から重点科目として「環境マネジメント (Umweltmanagement)」と「環境エコノミー (Umweltökonomie)」がドイツ大学で初めて設置された。両科目ともエコロジーとエコノミーとの間の現代的問題と学問的把握法とに取り組んでおり、92年夏学期より卒業に必要な科目に編入された。両科目の基礎ブロックは「環境と経済」であり、次の四つの講義、すなわち「エコロジーと環境技術の基礎用語」、「環境法と計画法」、「経営環境計画の基礎」および「環境物質のコーディネーション機構」がある。そして重点科目・環境経済論では環境に優しい経済開発の条件を追求している。また環境マネジメント論では経営経済的観点からの環境保全の問題が考察されており、分析の中心は環境保全をすべての企業の機能に取り入れることである。さらに、91年夏学期からは「経済と環境への学</p>	<p>エッセン大学より Gerd Rainer Wagner 教授が当大学に就任されてから環境関連講座が充実した。</p>	<p>工学部が充実しているためにもともとその方面からの素地はあった。しかし、後発の経済学部でも Harald Dyckhoff 教授のもとで充実した講座が開設された。92年冬学期には Dyckhoff 教授のもとで工業経営のコロキウム「企業と環境保全」が開設されている。</p>

	生イニシアティブ」が創設された。そこで学生達は経済的観点からみた環境保全について議論し、工業の意義を研究し、実現可能な解決策を探し求めている。		
94/95年冬学期	<p>重点科目環境経済論および環境マネジメント：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・環境法 (W. Hoppe 担当) ・環境技術・エコロジーおよび化学製品に関する基礎概念 (W. Barz 担当) ・環境エコノミー I (H. Bonus 担当) ・環境経済論ゼミナール (H. Bonus, H. -J. Ewers, R. Thoss および共同研究員担当) ・環境マネジメント理論 I (H. Meffert 担当) ・経営環境計画論 (計画設定と意思決定：D. Adam 担当) 	<p>ハウプトスツディウム：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生産管理論 V (材料管理, ロジスティックおよび環境保全, Stork 担当) ・生産管理論ゼミナール (生産に関連した環境保全の特殊問題, 集中講義, Janzen/Matten 担当) 	<p>経営経済学講座, とくに工業経営論および経済学：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・経営環境経済論ゼミナール (Dyckhoff 担当) ・ユーブング企業と環境保全 (ツザツスツディウム環境化学「環境と社会」の前提科目, Dyckhoff および共同研究員担当)
96/97年冬学期	<p>重点科目環境エコノミーおよび環境マネジメント：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・環境マネジメント (H. Meffert, M. Kirchgeorg 担当) ・副専攻学生および経済学専攻学生のための環境法 (M. Hoffmann 担当) ・プロジェクト AG の環境マネジメント (H. Meffert および共同研究員担当) ・自然経済学入門 (W. Ströbele 担当) ・経済および資源経済ゼミナール (H. Bonus, W. Ströbele および共同研究員担当) ・資源経済学とエネルギー経済学 (W. Ströbele 担当) 	<p>ハウプトスツディウムの特殊経営経済学講座 (生産管理論および環境エコノミー)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・経営環境エコノミーの概念 (Wagner) ・生産管理論ゼミナール (現在の環境指向生産管理論, 集中講座, Wagner および Janzen/Matten 担当) ・そのほかに環境保全を課題としたコロキウムが上記3教員によって指導されている。 	<p>経営経済学講座, とくに工業経営論および経済学：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・環境コロキウム「連結生産と原価削減」 (Dyckhoff, Souren, Darmstadter 担当) ・企業と環境保全 (ツザツスツディウム科目「環境と社会」の前提科目, Dyckhoff および共同研究員担当)
97年夏学期	<p>重点科目環境エコノミーおよび環境マネジメント：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・環境および資源エコノミーの基礎 (H. Bonus 担当) ・エネルギーおよび資源エコノミーゼミナール (D. Aufderheide, H. Clausen, H. Wacker ほか担当) 	<p>ハウプトスツディウムの特殊経営経済学講座 (生産管理論および環境エコノミー)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・企業の研究開発と環境保全 (Wagner 担当) ・環境エコノミー配慮下での給付生産およびその利用 (Wagner 担当) 	<p>経営経済学講座, とくに工業経営論および経済学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・環境指向の企業管理 (工業経営と環境保全, Dyckhoff 担当)

	<ul style="list-style-type: none"> ・環境技術，エコロジーおよび環境に優しい化学製品（W. Barz 担当） ・応用一般的均衡理論（J. Blank 担当） ・環境マネジメントⅡ（D. Adam 担当） ・環境マネジメントゼミナール（D. Adam, H. Meffert 担当） ・プロジェクト AG の環境マネジメント（M. Kirchgeorg 担当） 	<ul style="list-style-type: none"> ・環境関連の企業計画と企業会計（Janzen 担当） ・ゼミナール：環境指向の企業会計の展開（Wagner/Janzen 担当） ・ゼミナール：企業倫理と環境マネジメント（Matten/Haffner 担当，集中講義） ・コロキウム：環境政策および環境法に関する経営経済的意義（Wagner/Matten 担当） ・コロキウム：材料管理（Janzen/Matten/Haffner 担当，集中講義） 	
2000年夏学期	選択必修科目 環境および資源経済： <ul style="list-style-type: none"> ・環境政策（Pies） ・環境技術，エコロジーおよび環境化学（Barz） 環境および交通： <ul style="list-style-type: none"> ・環境政策（Pies） 		企業理論講座，特に環境経済および工業管理会計並びに経済学研究所（Dyckhoff） <ul style="list-style-type: none"> ・環境指向の企業管理（Dyckhoff） ・工業および環境ゼミナール（Dyckhoff 等）
2000／2001年冬学期	選択必修科目 エネルギー，資源，環境等： <ul style="list-style-type: none"> ・環境経済の基礎（Pies） ・環境経済専門ゼミナール（Hartwig 等） ・隣接領域専攻者および経済学専攻者向環境法（Wiggers） 	ハウプトスツディウムの特殊経営経済講座 経営経済的環境経済 <ul style="list-style-type: none"> ・経営経済的環境経済（Wagner） ・一般経営経済学／経営経済的環境経済（Wagner, Haffner 等） 	企業理論講座，特に環境経済および工業管理会計並びに経済学研究所（Dyckhoff） <ul style="list-style-type: none"> ・販売および生産関連のエコピランツのためのソフトウェア実務（Moeller）

(出所) 三大学の講義要項²⁾

Ⅲ ハノーファー万博におけるテーマとしての環境保全

ハノーファー市は、近年、国際産業見本市の開催地として有名であり、かつ英国ハノーファー王朝発祥地でもある。この市は、デュッセルドルフとベルリンとの中間にあり、その周辺には大きな都市はない。ドイツ人に言わせると「のっばら（野原）の真中にポツーンとある町だから、よほどの事がない限り訪問することはない所だ」という。

3-1 EXPO2000のテーマ

「新しい世界の創造—人間・自然・技術—」という総合テーマのもとに、2000年6月1日から10月31日までハノーファーで万博が開催された。170ヘクタールの会場に、173の国家、国際機関が参加して、56のパビリオンが立ち並び、未来に横たわる課題をどう克服するかに挑戦した。

EXPO2000は、従来のような技術進歩の成果を競う産業博覧会というよりも、「人類の共存・共生」をいかに達成するかを目指している。それと関連して、リオサミット「アジェンダ21」の原則である「持続可能な開発」を具体化した展示・建物も多数見られた。

3-2 環境保全と各パビリオン

日本館：

日本館では、「地球温暖化防止」のために、一国の取り組みだけでは解決困難な「CO₂排出削減問題」をメインテーマに掲げている。パビリオン前には、500名以上の見物客が待ってその関心の強さを示していたが、人捌けがよく30分程度で入館できた。その理由は中に入ってから理解できた。入れ物はアイデアものであっても、中がガランドウなのである。

ドイツの古紙を使用して造ったという全長90メートル、広さ3600平方メー

トルの建物が売り物である。建築家坂茂氏が資源保護・未来志向のテクノロジーを駆使して設計した、ドームを3つ繋ぎ合わせたような神殿風のパビリオンである。建物全体は、紙管のハニカム構造で支えられている。パビリオン建築に使われた部材には、紙管以外に屋根に貼る紙膜等リサイクル、リユース可能な素材も使用し、環境に配慮している。内部に入ると、環境技術の映像・解説は、全くありふれた物だった。かぐや姫の話、日本の郵便切手の紹介等。そんな中で洞窟をイメージした空間に日本の古紙で作製した「ほたる」という自動車は、なかなかの傑作であった。

DSD 館：

デュアルシステムのためのリサイクルの受け皿となる DSD 社のパビリオンである。1000名以上の観客が並ぶ、人気のあるパビリオンの前庭には、ガラス容器の砕いたかけらが砂利の代わりに轆き詰められ、その上に金網を掛けて歩きやすくしてある。このガラスのかけらはパビリオンの外壁にもトッピングのように散りばめ、リサイクルされていた。

ライフサイクルがテーマで、廃棄物がコンポストになり、森を形成する様子が実物を使って展示してあった。更に、1日の生活と環境問題との係わり映像でわかりやすく見せてくれた。その他、スープ、トイレ等の排水を浄化するためにどれほどの水が必要か、相当の水がビニールパックに入れられて吊り下げてあった。

テーマパーク・環境（Umwelt）館：

待ち時間なしなので、2度入場した。

このパビリオンでは、気候、水、森、土壌および都市のような環境の中で旅をする。この旅で人間は環境の一部であり、その行動によって環境に影響を与え、将来の環境に責任を持たなければならないとしている。

リサイクルが主要なテーマの1つになっていた。着物の一生というセクションでは、“Huete ist Mode, Morgen ist Abfall.”（今日はモード、あしたはゴミ）という文章が印象に残った。

ドイツ館：

館内に入ると、アインシュタイン、ブラント、グラフ等著名人の石膏製の巨大な顔が展示してあった。更に、歴史上有名な発明物・製作物が展示してある。例えば、グーテンベルクの印刷機、ナチス時代に製造された VW、バイキングの帆船模型等である。その他、「企業 (Unternehmung)」というテーマで企業化によって次々に生じる問題、すなわち製品化、大量生産、環境問題、技術革新、従業員の老齢化による年金問題を漫画にして映像で見せてくれる。更にまた、ドイツの生活を環境との関係を交えて映像で紹介するコーナーもあった。

オランダ館：

屋上にウインドパークがあり、自家発電可能で、水も循環使用する。エコサンドイッチ設計のパビリオンの4階にはカヤ等が茂り、3階には森林、2階には草花、1階にはビデオコーナーがあった。

10月31日に EXPO2000は閉幕したが、入場者数約1,500万人は目標の4,000万人を大幅に下回り、事業規模30億余マルクで約25億マルク以上の赤字になる見込みである。目標入場者数をあまりに多く見積もり、事業規模を拡大しすぎた嫌いがある。「環境」は、ドイツ人にとっては日常的なものであり、テーマに掲げてでも売りにならないという意見もあった。

Ⅳ ドイツにおける環境配慮型ビジネス

4-1 ドイツ企業と環境配慮

強力なリーダーのもとに、環境に関する市民運動の強力さは、エクソンが北海の老朽石油基地プラントを破壊して海底に埋めようとした時の反対運動に見ることができる。その日のマスコミは消費者のエクソン社ガソリン不買運動を大々的に伝え、運動の盛り上がりを支援した。後日、この環境負荷計算にミスがあることが判明したが、エクソン社としては計画を断念せざるを

得なかった。

なぜドイツ企業はかくも環境を配慮するのであろうか。その原因の一端は、国民・消費者の国政選挙に対する態度にある。約85%の国政選挙投票率は、選挙における各政党に対する脅威である。テレビでも選挙前日の20時台のゴールデンアワーに、環境問題をテーマとした政党間討論会を開催して、更に選挙民を煽る。各政党は、環境に配慮した公約を発表することで1票でも多くの票を獲得しようとする。そうした政党が政権を獲得すると世論を配慮した政策を発表し、環境配慮の法案を提出することになるのである。

政府・地方自治体による法規制制定で、かつてのように環境に優しい企業のみが、自発的に保全対策を行うというだけでは許されない。全ての企業が、法・条例で定められた最低限の環境保全対策を行わなくてはならなくなったのである。

企業の多くはこのような状況に対応して、環境保全を前向きに受けとめるようになった。早期に環境対策を行うことで、それを怠ったことによって生じる損失・費用の発生を未然に防止できること、環境汚染物質の処理原価の急上昇に伴い、そのリスクを減少させることが、将来の収益上昇につながる事が認識されるようになった。また、政府・地方自治体等の様々な環境保全優遇の助成措置の恩恵を受けたり、貿易障壁を緩和したりもしている。更に、環境先進的企業では、販路拡大の武器に環境保全戦略を採用したり、環境関連の事業を起こしたりしている。

4-2 ドイツにおける環境ビジネス

ドイツにおいて全ての環境ビジネスで採算性が合うか否かという問の答えは、“Nein”である。しかし、例えば、リサイクル原料を使用した生産が、何時も処女原料を使った生産よりも常に不利だとも言えない。たとえ現在、リサイクル生産が不利であっても均一化したリサイクル原料が大量に供給されるようになったり、リサイクル生産に習熟化すると、損益分岐点も下がり

採算性も上昇する。

Thyssen Sonneberg Rycycling :

ある夏の太陽のきらきら光っている日に、現在でも鉄鋼生産ドイツナンバーワンの子会社を訪問した。この会社では、郊外の広大な土地で主に冷蔵庫を分解して再使用可能なものは、回収して、残りはスクラップ化している。すなわち、回収した廃棄冷蔵庫のコードを切り、接着部分を剥がし、モーターを取り出す。こうして取り出したモーターのほとんどは、まだ充分使えるので関連会社へ売却するという。更にその他の部品を取り出し、再使用可能なものはモーターと同じように売却し、最後に残った鉄板、プラスチック等は細かく砕いて2次材料に使用するという。

その前身は Tyssen Kloeckner Recycling で、金属スクラップ、シュレッダー、触媒廃棄、冷蔵庫処理を主要業務としている。その95年の売上高は28億円である。

ACE 開閉装置(株) :

この会社は、高圧送電用の各種開閉機器・装置を製作している。ACE 社のモットーは、最新の製品、効率的な生産、最高の品質、環境保全にある。このモットーを支えているのは、製造原価削減への様々な努力と十分な環境保全対策を実施し、両者を同時に満足させ得る数多くの対策を見つけてきたことにある。

同社は、製造過程で生じた銀の含有量の高い沈殿固形物質を排水と一緒に流すことを止め、定期的にすくいあげた。その物質から、パートナー Degussa 社が純銀を再生回収してくれたが、その純銀を ACE 社は D 社に相場（1994年回収量52kg 当り13,000マルク）で買い取ってもらった。それにより ACE 社は、排水に混ざっている大量の銀から生じる環境汚染を防止したばかりでなく、回収した銀の売却で収益を得ることになった。⁴⁾

この他に、ドイツにおける代表的企業の概要を以下に紹介しよう。リサイ

クルビジネスの企業チャンスが注目されるにしたがって競争も激しくなり再編へと進んでいる。

RWE Umwelt (株) :

家庭ゴミ、リサイクル、産業廃棄物、特殊ゴミの処理を事業内容としていて、その売上高は93年14億マルク、99年40億マルクである。Trinikens を買収し、更に、VEW および Edelhoff と合併する。

Otto-Gruppe :

自治体受託、産業廃棄物処理、回収箱製造を主たる業務とし、その売上高は93年16億マルク、95年16億マルクである。企業買収によって、グループを解散する。

Rehtmann :

家庭ゴミ処理、リサイクルを事業内容とし、その売上高は93年12億マルク、95年15億マルクである。

Alba :

家庭ゴミ、リサイクル用廃棄物回収を主要な業務内容とし、その売上高は93年10億マルク、98年11億マルクである。

おわりに

ドイツだからといって全ての企業、市民が環境を配慮して行動しているわけではない。大きな都市の鉄道の駅での夕方、ゴミの山にはうんざりする。駅構内や列車には落書きが目立つ。犬の多いドイツでは、所かまわず糞が転がっているのにはがっかりさせられる。犬税を収めているから市の清掃員が掃除するのは当然と主張する不心得者も少なからずいる。人間どこでも楽のほうに流れるものである。

事業活動から生じる環境汚染を防止するためのコストと裁判費用を比較考慮して、環境対策を決定する大企業もあるとのことで、私に憤慨して話して

いたプロフェッサーもいる。それゆえ、法規も強化されざるを得ない。ドイツ環境会計の根幹に厳しい法規制等があることも見逃せない。

我が国では、この数年間で環境会計も一般化し、法規制等もかなり整備され、ドイツとの環境格差も大分縮まったことを、この旅を通じて肌身に感じた。企業の環境に対する意識も変化しているが、しかし、修理より新品販売という基本的な考え方は変ってない。

消費者も甘えを捨て、その商品を購入することで環境問題に自分の意見を表明したのだと自覚を持たなければならない。消費者から生産を変え、商店に並ぶ商品を変えなければならないと旅を終えて痛感した。

注

- 1) R, Butschkow & S. Schuermann: Ich hab einen Freund, der ist Muellmann, Carlsen Verlag, 1993.
- 2) 木下・中島・柳田編著『文化会計学』1998年, 115頁
- 3) Westfaelische Wilhelms - Universitaet Muenster: Personal- und Vorlesungsverzeichnis, SS1994, WS1994/95, WS1996/97, SS1997, SS2000, WS2000/2001
Heinrich Heine Universitaet Duesseldorf: Personal- und Vorlesungsverzeichnis, SS1994, WS1994/95, WS1996/97, SS1997, WS2000/2001
RWTH Aachen, Personal- und Vorlesungsverzeichnis, SS1994, WS1994/95, WS1996/97, SS1997, SS2000, WS2000/2001
木下・中島・柳田編著：前掲書, 122頁以下
- 4) Bundesumweltministerium & Umweltbundesamt (Hrsg.): Handbuch Umweltkostenrechnung, Verlag Franz Vahlen, Muenchen 1996. 125f.